

小さな国際討議の輪

東海大学

教授 町 田 登

「自分と価値観が同じ人、美しいものを美しいと評価できる人、大切なものを大切に認識して扱う人、控え目ではあるが必要なときにははっきり自分の意見を言える人。」昨年2月の誕生日、浩宮は記者会見の席上お妃の理想像についてこのように述べられた。そういった理想の方との出会いがあって、皇太子妃問題が本年早々一挙に解決したのは、千葉県市川の新浜鴨場でお二人の間にお互いの意見に耳を傾けることにより完全な意思の疎通があったからにはほかならない。

言語を使って意思の疎通を図る方法は「書く、読む、話す、聞く」というわけだが、これらがわれわれの生活時間の中で占める割合はどの位なのだろう。米国ミズリー州ステファン大学のバード博士の調査その他数少ない統計調査しかないが、それらの集計結果から推計して通常人のごく平均的な生活時間の中で占める割合は、書く 5%、読む 15%、話す 30%、聞く 50%とされている。つまり、聞くが話すのほぼ2倍の割合で、これはわれわれが耳2つ口1つをもっていることと一致する。いわゆる「聞く耳をもつ」ことが相互理解を深めるためには肝要だということであろう。言語を使っての意思伝達ではまず「よく聞く」ことから始まるといっても過言ではあるまい。意思の疎通を図るための第一歩は「よく聞き手」になる

ことであり、「よい聞き手」になることはまた「よく話し手」となることにも通じる。このことは同一の言語間でもまた異種の言葉を使用する場合でも同様であろう。

中南米、アジア、アフリカ、中近東の開発途上国から国際協力事業団が受け入れている技術研修員の数は年間2,000名を越すほどになっている。これらの受け入れ研修員に対してわが国の事情について概略的知識を与えるため、国際協力事業団は3日間の事前研修を実施している。この研修の「日本の政治・行政」部門で、昨年よく話題にのぼったのが皇太子妃問題であった。「皇太子も32歳、生活その他何の心配もないのに、お妃が決まらないのは本当にお気の毒。その一方、庶民とは違った格式のある皇室の家族になりたくないという若い日本女性の気持もよく分かる。だから、お妃候補を外国の王室関係にまで広げたらいいと思うのだが。生活環境も類似しているし、第一国際親善という観点からも結構すぐめではないか。世界には英国、ノルウェー、ベルギーなど王家は沢山ある。たとえば、タイの王室などアジア人として考慮に入れてはどうだろう。しかしそれでは、天皇家を政治に利用しないという日本国憲法に違反するのではないか。でも先だつての天皇中国訪問は政治とは無関係だと言えるか。」そんな討論が

なされたものであった。皇太子妃を外国に求めるなどというアイデアは、われわれに言わせれば突拍子もないことである。しかし、彼らからみればお妃が決まらないことは、皇室ばかりではなく日本国にとっても問題だと考え、いろいろと知恵を絞ってくれたと解釈すべきであろう。この研修部門で質議から討議の対象として多く出されるのは、自衛隊と憲法第9条との関係、国連PKO貢献のための自衛隊海外派遣の問題、皇室費が国家予算に占める割合、首相が公選でない理由、参議院の存在理由、憲法修正の可能性など多岐に亘っている。行政官庁の審議会制度について説明をしていた時、突然手が上がった。「日本では売春婦は成年女子の何%位を占めているか」という質問であった。唐突すぎるこの質問を咄嗟には理解できなかったのだが、政府の審議会リストのトップに総理府の売春対策審議会がでているためこの女性研修員は日本ではその対策が逼迫した最重要課題だと誤解したようであった。「日本の食堂では消費税をとるのに領収書を渡さないが、徴税の面で他の事業者との間に不公平が生ずるのではないか。徴税の公平性はどのように保証されているか」という質問が出たのは、国家予算の仕組み、税金の効率的活用のためのチェック・システムの話の後であった。このように、疑義を感ずると間髪を

容れず質問する態度には敬服する。質問や発言は自国と比較して日本の場合どのように対処しているのかに関心があるようだが、出身国の社会制度、文化的・歴史的背景はそれぞれに異なっている。その基盤に立って、20代後半から50代の年齢層の研修員達がそれぞれのお国訛の英語を使って意思の疎通を図ることはたいへんである。だから、何とかして自分の意見を理解してもらおう、また他の人の発言を理解しようという気持ちが滲み出てくる。

地球の大きさからみれば世界の片隅ともいえる所で開発途上国からの人々が何ヵ月かの日本研修を前に小さな討議の輪を作っている。こういった討議が次第に輪を広げて人間関係をスムーズにし、人類の平和に結びつくことを期待したい。

